

ウズリす



УзРус

文部科学省選定
「私立大学研究ブランディング事業」

立正大学ウズベキスタン
学術交流プロジェクト
ニュースレター

2018.07
創刊号



創刊にあたって・趣旨説明

調査活動報告 2018年3月ウズベキスタン学術調査隊

よりみちリサーチ 路傍の土製品

本の紹介 新アジア仏教史05 中央アジア
文明・文化の交差点 アレクサンドロス大王東征を掘る
—誰も知らなかった足跡と真実—

博物館みて歩き ウズベキスタン国立歴史博物館

みやげばなし ウズベキスタンの文化財建造物の修復の風景



創刊にあたって



立正大学は、天正8（1580）年に下総国に創建された日蓮宗僧侶の養成機関である飯高檀林を源流とする関東最古の伝統を誇る仏教系の総合大学です。近代的な研究教育組織としては、明治5年（1872）に檀林を廃して、東京芝二本榎に設立された小教院を起点としています。そこから平成29年（2018）は146年目にあたり、2022年に開校150周年を迎えます。

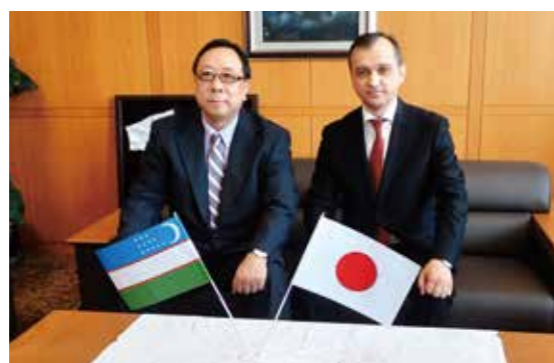
立正大学は、仏教系大学として仏教学部は勿論のこと、文学部でも仏教文学、仏教史、仏教考古学など仏教にかかわる様々な分野で相応の成果をあげてきました。

仏教はインド北部で釈尊（ガウタマ・シッダールタ）により紀元前に創始された宗教でガンダーラ地方からヒンドークシュ山脈を北に越えてバクトリア地方に、またパミール高原を越えて中国へと及びました。その経路はシルクロードとも重なります。また日本へは朝鮮半島を経由して6世紀の欽明朝に伝わり、中世に発展をとげて現在に至っています。

立正大学には、1967年からの10年間、ネパールで仏教遺跡を調査した実績があります。釈尊が青年時代を過ごされたカピラ城の比定地とされるティラウラコット遺跡では仏教学、考古学、地理学による総合調査を実施しました。この調査により多数の建物跡や遺物が確認され、その成果は現在の研究においても重要な価値をもっています。

この実績をふまえて、2014年度から古代バクトリアの地であるウズベキスタン南部のテルメズ郊外のカラ・テベ遺跡で仏教伽藍遺跡の発掘調査に着手、発掘を継続してきました。アフガニスタンとの国境という発掘調査に制限のある場所で、小規模な調査ではありましたが、多くの成果をあげることができました。

平成29年度には、立正大学のウズベキスタン学術調査を中心とした活動は、文部科学省の私学研究ブランディング事業に採択されました。平成30年度は、これまでの4年間の調査を集成した学術的な報告書の刊行、カラ・テベ遺跡近くのズルマラ仏塔の調査・保全事業を推進、ウズベキスタン・日本のシルクロード学のシンポジウムの開催などを予定しています。今後、立正大学がこうした活動を通して、ウズベキスタンとの日本の交流の一翼を担い、日本のグローバル化においても重要な役割を果たすことを期待しています。



齊藤学長とファジロフ駐日ウズベキスタン大使

立正大学長
齊藤 昇



趣旨説明



『ウズリス』は、文部科学省私学研究ブランディング事業「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」の広報誌です。立正大学ウズベキスタン学術調査隊の活動を通して、ウズベキスタンの文化や人びと、日常生活を紹介します。

立正大学ウズベキスタン学術調査隊の活動は5年目となりました。また昨年度から文部科学省私学研究ブランディング事業に採択されたことにより、ブランディングとしての活動をより強化していきなりました。調査隊はテルメズのウズベキスタンの仏教遺跡の発掘調査を継続して行っていますが、ウズベキスタンでの日本文化等に関わる講演会やウズベキスタンの研究者を日本に招いたシンポジウム、そして本誌のような活動を展開していくことで、積極的に両国の交流に寄与していきたいと思ひます。

本誌で用いた渦巻き状の唐草模様は、日本でよく親しまれているものですが、実は古代ギリシア起源でシルクロードを経由して日本に伝わったデザインに由来するとされており、ウズベキスタンと日本の関係の象徴として採用しました。リスは大学名のアルファベット表記（Rissho）に関連付けられたマスコットキャラクター（名前はモリス）です。なお、УзРисはロシア語やウズベク語で用いられるキリル文字で、英字のUzRisを表記したものです。

なお、しばしば遺跡名につく「テパ」は「丘」を意味するウズベク語です。しかし、学術的には長く「テペ」の表記が使われてきましたので調査隊では例えば「カラ・テペ」のように表記することにしています。



調査活動報告

2018年3月ウズベキスタン学術調査隊

調査隊のウズベキスタンでの活動は2018年度で5年目に入った。2018年3月のウズベキスタンへの渡航は、これまで活動してきたカラ・テペ（カラ・テパ）遺跡調査の総括と国際交流事業に関する準備、そしてズルマラ遺跡に関する新たな調査を目的とした。

立正大学文学部 准教授
(東洋史)、調査隊隊長 **岩本篤志**

専門は内陸アジア史、中国南北朝隋唐史。
現地の食事はプロフ(パラフ)、ラブシャがおすすめ。



テルメズ大学・学長専用棟前にて

報告

調査隊のウズベキスタンでの活動は、我々の校務と先方の都合をあわせるとだいたい9月か3月になります。9月は発掘調査が中心で、その準備や片付けなども必要なので最低2週間程度の滞在が必要です。ちなみに8月の渡航も不可能ではないのですが、現地の人は8月のテルメズは相当に暑く発掘には適さないといえます。9月のテルメズの日は普通に40度近くになりますが、朝夜は20度前後でわりと過ごしやすいです。また9月1日はウズベキスタンの独立記念日で祝日で、この日を含む1週間程度は休暇を取っている人が少なくありません。国外での考古学調査は、現地の人との協力が不可欠ですから、発掘作業はその後に開始ということになります。首都のタシケントと最南部に位置するテルメズとは気候はまるで異なり、昼夜の温度差があるので、年間通じて羽織るものをもっていくことをおすすめします。

さて2018年3月のウズベキスタンでの調査活動の目的は三つありました。一つは、カラ・テペ遺跡調査のパートナーであるウズベキスタン科学アカデミーを訪れ、5年の調査期間の最終年度の2018年度に予定しているシンポジウム等に協力を要請することでした。二つめは日本の大学としてウズベキスタンで

どのような学術交流活動ができるか、つまり、ウズベキスタンで日本の文化等に関する講演会を催すとするれば、どのような場所がよいか、聴講者をどのように集めるか事前調査をすることでした。そして三つめに、テルメズの仏塔ズルマラで調査保全事業を展開するに際して、環境調査測定機器の確認と地中レーダーによる遺跡の探査を予定していました。

ウズベキスタンでの講演会については渡航前に名古屋大学の今村栄一氏(委嘱隊員)から情報をいただき、日本との交流事業の場として用いられてきた平山郁夫キャラバンサライと日本語や日本のビジネスに関する講座をおこなう場であるウズベキスタン・日本センター(UJC)を候補としました。また地中レーダーの技術者として渡邊廣勝氏に、環境調査測定機器の確認に筑波大学の松井敏也氏(委嘱隊員)に、遺跡調査の撮影のためにTV局ディレクター森口郷志氏に同行をお願いしました。以上の理由で、活動はタシケントを中心とするものとテルメズを中心とする二隊にわけおこなわれました。日程については文末の日程概要をご覧ください。

結果として、目的を達成して帰国しました。成果は以下の通りです。

- ウズベキスタンで本学教員による日本の文化・学術に関する講演会を催すための場所と状況を確認
- ウズベキスタン科学アカデミー芸術学研究所のスタッフにイベントや刊行物への協力を依頼し、快諾を得た
- テルメズの仏塔ズルマラでの地中レーダーによる調査を遂行した
- ズルマラ周辺の環境調査機器の確認
- ズルマラの調査発掘については博物館主導のもと、テルメズ大が全面協力することを確認

とりわけ、テルメズ考古博物館とテルメズ大学が足並みをそろえるかたちでズルマラの調査に協力してくれることになったのは重要です。またテルメズ大からは大学間交流協定の実質化の要請を受け、日本の文化に関する講演会を大学で催すことを提案しました。

なお、2018年2月から、日本人のウズベキスタン渡航については1か月の滞在までビザが不要になりました。これまで煩瑣だった出入国時の所持金の申告も不要となりました。調査隊にとってこの措置は大変ありがたいものになりました。



ズルマラ地中探査レーダー作業の様子

日程概要

凡例(敬称略、本号執筆者の所属略)

1 第1隊: 安田治樹(仏教学部 教授)、石田恭啓(研究推進・地域連携課 課長)、小林一博(研究推進・地域連携課 職員)

2 第2隊: 岩本篤志、紺野英二、黒尾大地(文学研究科 院生)、渡邊廣勝(国際文化財株式会社)、森口郷志((株)WAC) / 松井敏也(筑波大学 世界遺産専攻 教授、3/10~3/12)、今村栄一(名古屋大学ウズベキスタン サテライトオフィス 職員、3/7~3/10)

3/5 (月)

1 タシケント: 入国(成田発仁川経由)

3/6 (火)

1 タシケント: 平山郁夫キャラバンサライ → 日本人墓地 → 名古屋大学ウズベキスタンサテライトオフィス → UJC

2 タシケント: 入国(羽田発仁川経由)

3/7 (水)

1 2 (+今村) タシケント: ウズベキスタン科学アカデミー芸術学研究所でスタッフらと打ち合わせ。一部隊員は発電機購入のためバザールへ

3/8 (木)

1 タシケント: 在ウズベキスタン日本国大使館 表敬訪問

2 タシケント → テルメズ: カンピル・テペ → ファヤズ・テペ → ズルマラ → テルメズ考古博物館で打ち合わせ

3/9 (金)

2 テルメズ: テルメズ考古博物館で打ち合わせ。第2隊を一時的にズルマラ調査従事者とテルメズ大学訪問者に分離。
2 テルメズ: ズルマラ調査開始。調査地の草刈り作業の準備。発電機不調により調整、地中レーダー探査作業・測量開始。

2 テルメズ: テルメズ大学訪問。テルメズ大にて、大学関係者数名、テルメズ考古博物館館長、観光省担当者らと会合。

2 テルメズ: 第2隊合流、ズルマラ周辺の草刈り開始。地中レーダー探査作業、図面作成を進める。

1 タシケント: 帰国(仁川経由、成田到着は3/10)

3/10 (土)

2 (+松井) テルメズ: ズルマラ、地中レーダー調査、図面作成を進める。博物館敷地内設置の気象観測機器の不具合修正。今村氏、タシケントへ

3/11 (日)

2 テルメズ → タシケント: ズルマラ、地中レーダー調査、図面作成を進める。タシケント移動後はホテル内滞在。

3/12 (月)

2 タシケント: 帰国(直行便、成田到着は3/13)





路傍の土製品 ～タンドール窯とレンガ

立正大学文学部 教授(考古学)、
副学長、調査隊副隊長 **池上 悟**

専門は仏教関係遺跡・遺物などの研究。
ウズベキスタンの夏は暑いけれども、なかなか良いところもあります。



キルク・キズ宮殿

調査隊が対象としている遺跡はどれも日干しレンガの建造物であり、どのようなレンガがつかわれたかは、その特徴を知る手がかりとなる。ウズベキスタンの地では現在も日干しレンガや土製品が日常的に使われており、その製作過程は興味をひく。



路傍のレンガ製作



日干しレンガと木枠

タンドールの製作過程



1 タンドール窯の基礎部分の製作
幅30cmほどの粘土板を丸くする。



2 タンドール窯中段の製作
用具で叩き締めながら、基礎との接合を丁寧におこなう。



3 タンドール窯上部の製作
上をすぼめて円筒状に製作して口縁部を厚くする。

タンドール窯の製作過程

ウズベキスタンの南東部、カラ・テペ遺跡の所在するスルハンダリヤ州の郊外を移動し、クシャン朝の遺跡を視察する途中、道路沿いに土製品を製作している現場を見受けることが多くありました。ここに報告するところは、調査初年の2014年に北部の重要遺跡であるダルヴェルジン・テペ遺跡を視察する途中に実見したものです。

タンドール窯は、直径100cm、高さ70cmほどの大きさのおわんを伏せたような形の粘土製の壺窯型オープンです。中で燃料を燃やして調理するものです。

タンドリーチキンなどの肉類、ナンなどのパン類もタンドールで焼き上げたものです。

この製作過程は、別に成形した幅30cmほどの粘土板を巡らして叩きながら基底部を形作り、この上に粘土板を積上げて、叩き締めながら径を小さくした上部を形成し、縁に粘土紐を巡らして全体の形を整えています。

製品は日干しして完成させるようで、特には焼成しないようです。

この現場では、4人ほどがササを入れた土を捏ねて粘土板を作り、製品の

成形には親方のもとに3人ほどが作業していました。

郊外地では、リヤカーなどにタンドールを積んで運搬する状況をよく見受けました。

街の食堂では、中庭に面してカマドを造り付けて、マトンやチキンの肉類やナンを焼いていました。また市街地のバザールでは多量のナンを専門店に売っており、個別にはタンドールを設置して作ってはいないようでした。

タンドールの最古の例はインダス文明の遺跡で確認されており、インド・パキスタン・中央アジア諸国で使用され、伝統的な料理を作る基本となっています。

日干しレンガの製作

日干しレンガは、古代から現在に至るウズベキスタンの建築資材として重要なものとなっています。立正大学学術調査隊が調査している、カラ・テペ遺跡、ズルマラ仏塔も日干しレンガで構築されています。仏教伽藍遺跡であるカラ・テペ遺跡では、日干しレンガを積上げて壁を構築し、この表面に壁土を塗って整え、回廊などでは壁の下半を赤色、上半分には白色の彩色を施しています。

道路沿いに確認できたレンガ製作の状況は、基盤の土を掘り上げて捏ねて粘土とし、粘土を型に入れて成形していました。

ここでは厚さ10cmほどの長方形のレンガを型で製作し、並べて乾燥させていました。乾燥して完成した製品を道路沿いに積上げて販売していました。値段は一個、日本円で数円程度の廉価なものでした。

この現場で使用されていたレンガ成形用の木製の型は、市内のバザールで販売していました。幅14cm、長さ27cm、厚さ10cmほどの小形のレンガ用でした。

ここで確認できた光景は、市街地でも見ることができます。カラ・テペ遺跡調査のベースとしている町中の建物の前でも道端で建物補修用の日干しレンガを製作していました。これもバザールで販売している型枠を使用していました。

カラ・テペ遺跡で使用されている日干しレンガは、大きくは古い時期のレンガが一辺32～33cm、厚さ12～13cmほどのものであり、新しい時期のレンガは一辺35～36cmで厚さ12cmほどのものと確認できました。

古い時期のレンガはクシャン朝(A.D.2～3世紀)の年代と考えられ、隣接するファヤズ・テペの仏教伽藍遺

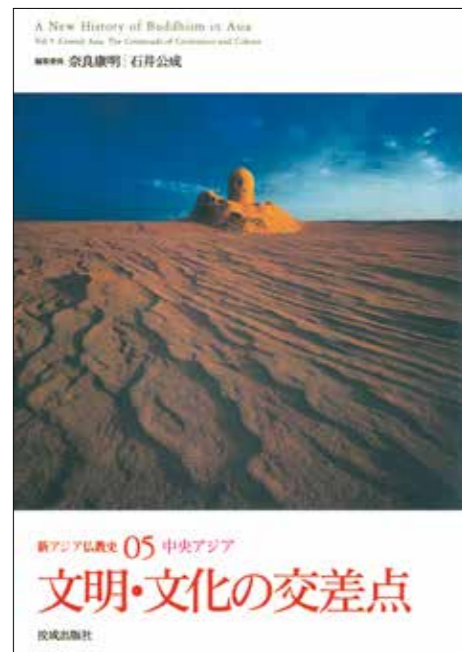
跡、ズルマラの仏塔などで確認される場所です。

カラ・テペ遺跡より古い時期のグレコ・バクトリア時代(B.C.3～2世紀)のカンピル・テペでは、一辺28～32cm、厚さ10～12cmの大きさのレンガが確認されます。

クシャン朝以降のポスト・クシャン期、継続する時期のレンガは大きくなり、薄くなる変遷が確認できます。9～11世紀の年代が想定されているキルク・キズ宮殿では、一辺37cm、厚さ7cmほどのレンガが使用されています。この建物は、発掘調査が行われ、修復の工事が行われていました。

レンガもまた当時の人々が作った遺物であり、各地の遺跡の年代を相対的に把握するための重要な資料となっています。

建物を建てる場合には、基準となる長さを設定しています。これはウズベキスタンを含め世界の遺跡にすべて認められます。日本では縄文時代から一定の長さの基準が想定されており、古墳時代では横穴式石室の構築時の長さの変遷が明確になっています。



新アジア仏教史 05 中央アジア 文明・文化の交差点

奈良康明、石井公成 編

佼成出版社
2010年10月刊



アレクサンドロス大王 東征を掘る

—誰も知らなかった足跡と真実—

エドヴァルド・ルトヴェラゼ 著
帯谷知可 訳

日本放送出版協会
2006年5月刊

異彩を放つ中央アジア仏教史を詳述

かつての『アジア仏教史』（全20冊、佼成出版社、1972-76年刊）以来約35年を経、学界の最新研究成果をふまえて出版されたものが、ここに紹介する『新アジア仏教史』（全15冊、同社、2010-11年刊）である。

第5巻目次

序（奈良康明、石井公成）

第1章 インダス越えて一仏教の中央アジア（山田明爾）

第2章 東トルキスタンにおける仏教の受容とその展開（橋堂晃一）

第3章 中央アジアの仏教写本（松田和信）

第4章 出土資料が語る宗教文化—イラン語圏の仏教を中心に—（吉田豊）

第5章 中央アジアの仏教美術（宮治昭）

第6章 仏教信仰と社会（蓮池利隆、山部能直）

第7章 敦煌—文献・文化・美術—（沖本克己、川崎ミチコ、濱田瑞美）

各章の要旨は「序」に示されているのでそちらをご覧ください。本書刊行の意義は、その序に「旧版が刊行されて以来、日本や他の諸国の調査隊による発掘調査が盛んに行なわれたうえ、驚くべき写本群の出現も度重なったため、この地域の仏教に関する研究は、大幅に進むに至った。仏教伝来の単なる通路とみなされてきた地域の研究が、逆にインドや中国の仏教の歴史を書き換えつつあるのが実情である。」とある文に集約されていよう。旧版が初学者にも読みやすい概説書であったのに対し、本書の章構成は、執筆陣各々の専門性に基づいて各研究分野の成果を広汎に紹介するものである。とはいっても、各章が全く独立している訳ではなく、諸研究が重層的に示されることにより、中央アジアの仏教の多面性を遺憾なくあぶり出している。

少し具体的にいうと、この地域に行なわれた仏教は、一定の独自性をもって存立していたこと、また「インド仏教」と「中国仏教」の間にあってさまざまな

変質と変転を内在していたことが示唆される。例えば、教義と瞑想に基づく修行体系であったインドの仏教から、庶民的、実践的な宗教としての性格への変質（第1章）、仏教の東伝と中国からの「西伝」（第2章）は、いずれも民族と文化のつぼであった中央アジアを舞台として現れた形であり、仏教の伝播には複雑かつ多様なすがたがあったことが示されている。ウズベキスタン関連では、バクトリア語仏教文書（第3章）や、バクトリア地域とパルティア地域における諸宗教の状況など（第4章）、寺院遺跡への注視とは異なる視点からの考察が理解を立体的にさせてくれる。

この地域の仏教史、宗教文化史を知る上で、もっとも基本とすべき書といえよう。

立正大学仏教学部 教授
(東洋史・仏教史)、調査隊隊長
手島一真
専門は中国南北朝隋唐時代の仏教・宗教社会史。アレクサンドロスも通った鉄門址は必見。ビーツのヨーグルトサラダはピカイチでした。

立正隊調査地周辺の遺跡を多数紹介

ウズベキスタン考古学の第一人者によるアレクサンドロス大王の中央アジア遠征に関する著作の翻訳。2018年6月時点でNHK出版のホームページで在庫なしだが、公立図書館や古本で容易に手に取ることができる。

アレクサンドロス3世（大王）は、ギリシア諸都市の同盟に君臨した父のフィリッポス2世の遺志を引き継ぎ、エジプト、西アジア、中央アジアそしてインドの北部にまでその領域を拡大したことはよく知られている。最大の敵は西アジア・中央アジアを支配していたアケメネス朝だった。その首都ペルセポリスを大王軍が陥落させると、求心力を失ったダレイオス3世は部下のベッソスに殺害された。ベッソスはアケメネス朝の再興を宣言、バクトリア、ソグディアナ（現在のアフガニスタン北部からウズベキスタン南部・中部）に拠点を置いた。大王はベッソス追討を旗印にさらなる東征に乗りだし、バクトリアに進撃し、北上してアマダリヤを渡河、マラカンダ（サマルカンド）のあるソグディアナに向か

い、ついにベッソスを捕縛した。このバクトリアは現在のアフガニスタン北部のバルフにあたる。また、アレクサンドロスの東征について史料を整理した古代ローマの歴史家アッリアノスやクルティウス・ルフスによると、ベッソスはバクトリアとサマルカンドの間の「ブランキダイ」で捕縛され、大王軍がサマルカンドからバクトリアに戻る際には「ナウタカ」の「シシミレトス」や「コリエネス」という岩山に築かれた反大王派の有力者がたてこもる堅固な要塞との激戦を制したとされるが、これらが現在のどこにあたるかは、長いこと議論のまどであった。ルトヴェラゼはこの原書で、地図や文献だけでなく、数十年にわたる綿密なフィールドワークと考古学調査とによって従来の説を覆し、アレクサンドロス東征の足跡をときあかした。

そして、その研究を受け継いだ現在の発掘調査により、ウズベキスタン国内のアケメネス期以降の山寨址や貨幣をはじめとした遺物が次々と発見されている。なお、岩山の要塞との戦いの際に

降伏した有力者の娘は後に大王の妻となっており、バクトリアはその東征を象徴する地域の一つといってよい。本書の舞台はウズベキスタン南部のスルハンダリヤ州（中心はテルメズ）やカシュカダリヤ州（中心はサマルカンド）である。本書にはその地名や古代遺跡名が次々に出てくるから、もし、サマルカンド以南の遺跡を見学する機会があるなら、本書を持って行くことをおすすめしたい。現在は砂塵に埋まった丘の下にはかつて多くの人が行き交った町や道路、大河に開いた港がある。そこを前4世紀の大王軍だけでなく、7世紀の玄奘やティムールに謁見するためにマドリッドからきた15世紀のクラビボが通ったことを知れば、旅は一層豊かなものになるし、古代史や考古学のおもしろさを感じる事が出来るだろう。

立正大学文学部 准教授
(東洋史)、調査隊隊長
岩本篤志
専門は内陸アジア史、中国南北朝隋唐史。現地のビールはサルバストとバルティカ3がおすすめ。



ウズベキスタン
タシケント

博物館みて歩き

ウズベキスタン国立歴史博物館

立正大学文学部 講師 (博物館学)・調査隊隊長 **紺野英二** 専門は考古学、南武蔵の古墳。体調の悪い時はウオッカを飲めといわれたが、おすすめはスイカとメロンと青い空。

学術交流プロジェクトの遂行には、空路などでの移動を伴います。その途中、博物館を見学する機会に恵まれました。ここでは、ウズベキスタン共和国における博物館を紹介をします。

タシケントにあるウズベキスタン国立歴史博物館は、国内でも有数の展示施設です。展示室は、3階と4階が常設展示室となっています。3階展示室は、1.ウズベキスタンの石器時代に始まり、2.青銅器時代、3.(ウズベキスタンの)成立、4.形成、5.科学と文化、6.アムール・ティムールとその時代、7.ウズベキスタンの成立まで、という構成です。また、4階は3階に引き続き8.ウズベキスタンの近現代、9.ウズベキスタンの独立という近現代史の紹介となっています。

石器の展示には、着柄したものも展示し、石器時代の生活をイラストで表現するなど、さまざまな方法でその時代の文化を紹介しています。ここでは、壁面などを利用した造作模型を数多く採り入れていました。なかでも仏教遺跡のコーナーは注目できるものです。ここでは、学術調査隊が調査している遺

跡の位置する国内南東部、スルハンダリヤ州出土の仏教遺物が数多く展示されています。とくにカラテペについては、寺院内の2本の柱を想起させる造作の中間に楽器を弾く眷属神像を展示し、近傍に発掘された壁画とその復元展示という方法を採用していました。また、ファヤズ・テペ出土の仏像を展示し、壁面には、この遺跡で発見された仏塔を模型により半分だけ表現しています。この模型はストゥーパの築造当時の復元をおこなっており、塔には漆喰が塗られ、この上に描かれた文様も復元されています。さらに、ファヤズ・テペで発見された釈迦三尊像は、仏教伽藍遺跡としての代表的な遺物として、この遺跡出土の壁画の近くに展示され、この館の仏教遺物展示の中では、注目に値する資料として扱われています。

続いて14世紀から15世紀の展示物にも注目します。ここで目を引くものは、やはり青色の装飾タイルです。青色はモスクの装飾タイルなどに用いられるほか、展示品からは、彩色陶器などにも使用されていることがわかります。この

青色の焼き物は、はじめ中国で陶器に使用されたと推定されます。青色の陶磁器は、中国では「青花」と呼ばれ、元代以降は、東アジア全域で流通するようになり、日本でも戦国大名の館跡などで発見されています。なかでも関東を領有した後北条氏は、青花の陶磁器類を大量に保有したことが知られています。さらに近世になると、国内で生産されるようになり、「染付」の名で親しまれています。

さて、このように日本でも親しまれている青の色彩ですが、弥生時代のガラス玉にもみられ、歴史的には、陶磁器よりもさらに古いものといえます。これまで青色のガラス玉は中国で作られたものとされてきましたが、近年の研究成果では、中国製に「？」が付きはじめています。想像を逞しくすれば、中央アジア、西アジア方面のガラスがシルクロードを通過し、日本に到着したのかもしれない。

中央アジアの地は、古来より仏教以外でも私たちの生活と少なからず関係しているものといえます。

お知らせ

■立正大学ウズベキスタン学術調査隊による近刊図書・報告書

- 『ズルマラ：テルメズの仏塔 —基礎調査報告書—』(編集・執筆：岩本篤志、今村栄一、松井敏也) 2017年9月
- 『カラ・テペ遺跡 —2017年度調査概要報告書—』(編集・執筆：池上 悟、安田治樹、島津 弘) 2018年3月
- 『ズルマラ塔 調査・保存・整備 事業概報—2017年度—』(編集・執筆：岩本篤志、紺野英二) 2018年4月

■これからの活動予定

2018年7月～11月

特別展

「シルクロード新世紀—ヒトが動き、モノが動く」

本学の調査活動をポスターにて紹介

- 岡山市オリент美術館：7月14日(土)～9月9日(日)
- 古代オリент博物館(池袋サンシャイン文化会館7F)：9月15日(土)～11月25日(日)

2018年9月4日(火)～9月20日(木)

秋期調査・発掘(ズルマラ周辺試掘・環境調査)、現地にて日本の文化等に関する講演会、TV局(BSフジ系)による現地取材

2018年11月23日(金・祝) 午前10時～午後17時

シンポジウム「シルクロードの歴史・考古・美術」

場所：立正大学 品川キャンパス 石橋湛山記念講堂
 ビダエフ先生(ウズベキスタン科学アカデミー芸術学研究所所長)、トゥルグノフ先生(芸術学研究所所長)はじめとした先生方をお招きする予定です
 ※聴講無料・事前申込不要

※このほか、随時、講演会などで調査の成果をご報告していきます。なお、本年度中にTV局(BSフジ)にて、本学の調査活動の成果の一端が放映される予定です。詳細がわかりましたら本事業のホームページまたはFacebookにて告知します。

編集後記

イスラーム教の信者が圧倒的多数を占める旧ソ連圏の中央アジアの国ウズベキスタンについて日本ではよく知らないという人は少なくないでしょう。しかし、学問というのは元来、未知の世界に飛び込んでいくものですから、そういう分野に挑戦する志ある人や、交流を深めることをあと押しして下さる方々もいるものと確信しています。また中央アジアの国々は国際政治において年々存在感を増しつつあります。しかもウズベキスタンは中央アジア最大の人口

(約3200万人)を有し、人口の中央値は26才(日本は45才)だといわれています。そういう意味では今後飛躍的に発展していく可能性を秘めた国であり、未知な部分が多い故にお互いに得るところも大きいだろうとおもいます。なお本誌は学内の教員・学生のほか、オープンキャンパスでも希望者に配布の予定です。また年2回発行予定です。次号は11月中の予定です (A)

「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」スタッフ

- ◆事業責任者 …… 池上 悟(文学部 教授・副学長)
- ◆研究ブランディング担当 …… 永井 智(心理学部 准教授・学長補佐)
- ◆調査隊隊長 …… 安田治樹(仏教学部 教授)
- ◆プロジェクトリーダー …… 岩本篤志(文学部 准教授)
- ◆主管部局 …… 研究推進・地域連携センター／研究推進・地域連携課
- ◆関係部局 …… 広報課

ウズベキスタン学術交流プロジェクトニュースレター

- ◆編集委員 …… 岩本篤志、紺野英二、手島一真

文部科学省 私立大学研究ブランディング事業
「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」

ウズリす 創刊号

2018年7月19日発行

編集・発行
立正大学 ウズベキスタン学術交流プロジェクト
ニュースレター編集委員会

〒141-8602
東京都品川区大崎4-2-16
立正大学 研究推進・地域連携課

<http://www.ris.ac.jp/branding/about.html>
<https://www.facebook.com/RisshoUniv.Uzbekistan/shien@ris.ac.jp>

印刷 株式会社 ダイヤモンド・グラフィック社

ウズベキスタンの文化財建造物の修復の風景

私は2017年度の立正大学ウズベキスタン学術調査隊による、カラ・テベ遺跡の調査に大学院生として9月16日～26日の10日間の日程で参加しました。遺跡調査の合間にスルハンダリヤ州の他の遺跡を訪れ、見聞したところを報告します。

シュフラッテさんという地元で文化財修復を担当されている方の修復現場を訪れました。修復現場は、テルメズから北東に150km離れたデナウという、街の近くでした。(P.5地図参照)

最初にデナウに至る途中のマケドンという場所に位置するアレクサンドロス橋と呼ばれる橋の修復現場を見学しました。橋は現在の道路沿いにある、古い道路に架けられたものであり、現在は使用されていません。橋はレンガ造りで、使用されているレンガのうち、破損している箇所を追加補充し修復していました。橋の全長は、約25m、旧川床より高さは約10m、幅は約7mの規模でした。橋の中心部の断面形状は尖頭アーチ状となっています。川は見学時には水は流れていませんでした。レンガは、約20cm四方、厚さは約5cmで、互目積で積まれています。シュフラッテさんのお話では、この橋の構築年代は16世紀であり、近くの同時代のイスラム教の神学校で使用されていたレンガを再利用して修復しているそうです。橋は多くのレンガが抜け落ちており、修復作業に使用されるレンガが付近に山積みされていました。

デナウの街は人口約10万人の都市で、付近にはスルハンダリヤ川が南流しています。近辺の遺跡としては、カラ・テベ遺跡と同時代の有名なダルヴェ

ルジン・テペとその離宮とされるカラバグ・テペがあります。

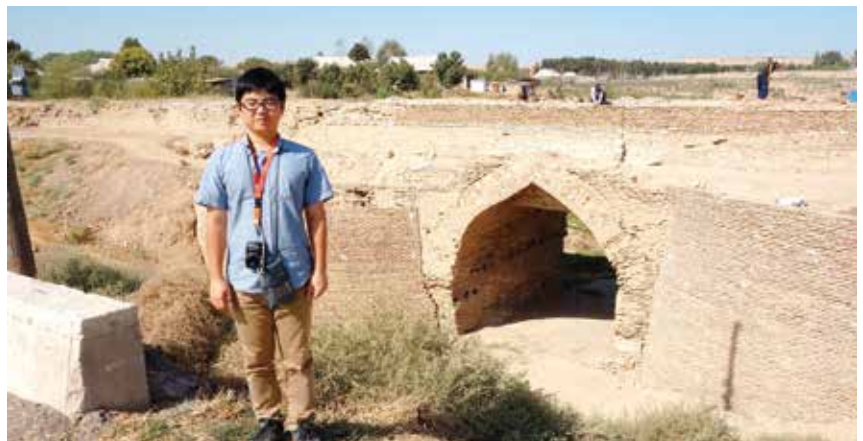
デナウの街の中心部には、16世紀に建てられた、サイド・アタリク・マドラサが現存しています。マドラサとは学校のこと、一般的にはイスラム教の神学校を意味します。このデナウの神学校は、現在は市場のすぐ横に位置し、住民が倉庫などに使用しています。建物の構造は、2階建てで、中庭を中心に四周に2階建ての建物を巡らし、中庭側の1階と2階は回廊となっています。

この神学校では、建物全体の修復作業が行われており、訪れた際には、屋根の修復を行っていました。屋根上

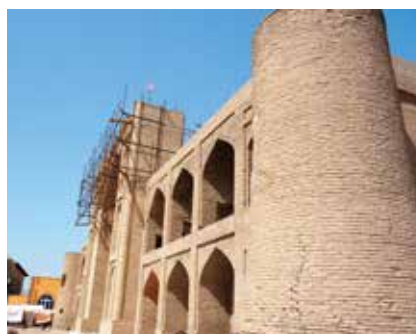
換気を目的とした通風口を設置し、いまままで屋根に敷かれていた土の代わりに膨張粘土と呼ばれる固形の土を敷き詰める作業を行っていました。

通風口と膨張粘土のおかげで、夏は涼しく冬は暖くなるそうです。また、屋根の土を入れ替えることにより、建物への重量負担が大きく減って軽量化になるということでした。また、壁に使用されているレンガの隙間のモルタルも、入れ直していました。

建造物の外観を大きく損なわず、修復するというウズベキスタンにおける文化財の修復のための工夫を、2か所の修復現場から知ることができました。



アレクサンドロス橋



サイド・アタリク・マドラサ



神学校の屋根に設置された通風口